

2013年2月10日・中國新聞「郷土の本」欄では

素直な言葉に鋭さにじむ詩

米子市のライター中村真生子（本名中村富士子）さん（54）が、詩集「なんでもない午後に ― 山陰・日野川のほとりにて」をコールサック社（東京）から出した。2010年から自身のブログでほぼ毎日発表している作品の中から101編を選び、序詞と10章に再構成した。素直で柔らかな言葉に、社会を見つめる鋭い感性と、生きることへの責任感がにじむ。

「(略)朝が生まれた／喜びや希望やせつなさや／感じるができない繊細な感情をも／光の糸に織り込みながら／朝が生まれた／今日が生まれた」（「今日が生まれた」から。）

目覚めから眠りまで、流れゆく一瞬一瞬の時間と丁寧に向き合い、その豊かさを味わおうとする前向きな姿勢がさすがらしい。

鳥取県大山町出身の中村さんは進学のため上京。夫の転勤で1997年から米子市に移り詩作を本格化した。

「詩作は自分探し。もやもやした思いも文章にすることで前向きに考えられる」と話す。

と紹介されています。